

## 田舎ならではのぜいたくな楽しみ

開園してから一昨年まで46年間過ごした旧園舎の場所は、山と川と畑と田んぼが広がる地域のど真ん中にあり、日々、自然とかかわる保育が主となっていました。当然、農作物とのかかわりも豊かで、食育という言葉を使いながら実践していたのが、「野菜や果物を収穫して、おいしく食べる体験」でした。

自然いっぱい地域で、数多くの野菜や果物を収穫する子どもたちの笑顔は大きな自慢でした。サツマイモ、ピーマン、ナス、トウモロコシ、トマト、スイカ、ニガウリ、シイタケ、ゴボウ、ラッカセイ、クリ、ダイコン、レタスなどなど、これまでに20種類を超える作物を収穫し、旬の味を楽しんできました。

みなさん、トウモロコシを収穫後すぐに熱湯で30秒だけゆでたものを食べたことがありますか？ とれたてのシイタケを七輪で炭焼きして食べたことがありますか？ 鹿児島ではラッカセイを塩ゆでするのが定番ですが、味わったことがありますか？ 施設周辺で収穫したクリを使った栗ごはんの給食メニュー。園庭で収穫した桜島小ミカンをその場で味わうなど、これらの抜群のおいしさは子どもたちの心にも残る、田舎ならではのぜいたくな楽しみです。時季に応じた豊かな収穫体験ができる環境は、多くの方が、うらやましく感じるのではな

いないでしょうか？

### 収穫イベントで終わっていないか

楽しく収穫する！ 旬の味覚を味わう！ という体験活動が、最高の食育だと思っていました。しかし、ある時ふと、それだと収穫までの苦勞を知ったり、作物への愛着を感じたりすることができないと気づきました。「今の自園の活動は食育というより、収穫イベントで終わっているのではないだろうか？」という疑問がわいてきました。私自身が茶業農家で育ち、農家の方々が汗水流して働いている姿を目にしてきたからの思いなのかもしれません。

自省を込めてこれまでの活動を振り返ってみると、子どもたちが草取りに汗を流したことはありませんでした。害虫や病気が発生しても、解決するのは大人でした。台風で被害を受けても悲しむことはありませんでした。失敗のない収穫体験とおいしい食事体験を楽しむだけのくり返しに、私たち職員が満足していました。もっと子どもたちが主体的に取り組む活動でなければ、「食育」という言葉を使うことはできないのではと思うようになりました。まずは、自分用の鉢やプランターを与えて、収穫までの過程を大事にする取り組みを始めました。しかし、期待しているような姿は見られず長続きもしませんでした。

### 子どもが耕す「あたしんちの畑」

思いついたのが「園児に自分用の畑を耕作させてみよう」という取り組みです。土地はいくらでもあります。これこそ田舎の特権です。

もっとも広すぎたり離れたりしている場所では、世話や管理が大変です。そこで、園庭の端っこに70センチ四方ほど、ちょうど0.5平方メートルの区画を作り、年長児の家族に分譲しました。これが「あたしんちの畑」です。

そして、「どんな作物でもかまいません。家族で世話や管理を楽しんでください」とお願いしました。これが大きな成功につながったポイントの一つでした。園児だけでは学びは深まりません。また、職員が管理しては、これまでと同じで子どもたちが主体的に取り組む機会はなくなります。

最初は成功体験を味わってもらえるように、ハツカダイコンとサニーレタスの種まきを一齐に実施しました。さっそく成果が出始めて、持ち帰って親子で調理を楽しみ、おいしく食べたという声が届くようになりました。その後は家族同士が競い合うようにして、様々な作物の種や苗が植えられるようになりました。

子どもたちは、時間があれば「あたしんちの畑」に向かうようになり、世話や管理を楽しむ姿が日常化しました。さらに、いろいろな人とのコミュニケーションが深まる姿、笑いあり涙ありの数々のドラマが展開される姿、畑を耕作するアナログ活動がデジタル保育にも連携できた姿など、私たち職員の想定を大きく超える成果がありました。詳しくは、次号以降で紹介していきますので、お楽しみに。



子ども一人ひとりの名前をつけた「あたしんちの畑」



「あたしんちの畑」にミニトマトがなった！

そろそろ収穫できるかな？